



碧南ロータリークラブ週報

第2494回例会 平成22年3月24日(水)

●会長 鈴木 並生 ●幹事 長田 豊治 ●会場監督 (SAA) 新美 真司

■例会日 毎週水曜日 12:30

■例会場 碧南商工会議所ホール

■事務局 碧南商工会議所内

〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町90

TEL<0566>41-1100 FAX<0566>48-1100

ホームページ: <http://www.hekinan-rc.jp/>

E-mail: info@hekinan-rc.jp

■会報委員 岡本明弘・新美雅浩・大澤明敬・西脇博正

ロータリーの未来は
あなたの手の中に



2009-2010年度
国際ロータリーのテーマ
THE FUTURE OF ROTARY
IS IN YOUR HANDS

● 斉 唱

ロータリーソング「ロータリー讃歌」

● 本日のメニュー

和風弁当 とんがり帽子

副 会 長 挨拶



原田達八 副会長

本日は鈴木会長が欠席ですので代わりに挨拶をさせていただきます。

2月17日の中日新聞の記事に西端の応仁寺所有の蓮如上人直筆とされる掛け軸「墨書六字名号」二点と「正信偈文」を4月1日付けで市有形文化財に指定をするという記事がありましたので、このことについてお話をさせていただきます。

まず、はじめに応仁寺についてお話をします。応仁寺は西暦1468年(応仁2年)創建のお寺で蓮如上人を開祖とする真宗本願寺派のお寺で、寺の名前に年号を取ったのは全国的にも珍しいです。蓮如上人が西端に来たときの年号をとったもので、年号を寺の名前に使用することを許されたのは江戸時代の元禄の頃です。蓮如上人は室町時代京都を中心に起きた応仁の乱により京都周辺では住みづらくなり、弟子の如光(にょうこう)の案内で西端の地に案内され、三河地方の布教活動をしておられました。その拠り所としていた道場がのちに応仁寺となりました。そして、蓮如上人は応仁2年10月に北陸地方の布教のために京都に帰られました。西端を去る時に村人に「縁がありましたら、きっと西端の地に参ります。」と言って六字名号ほかを形見としておいていかれました。それ以来、住職をおかず、地区で選ばれた世話方で寺の行事、管理一切を仕切っており、全国的に見ても特異なお寺であります。

昭和に入ってから、昭和20年1月13日の三河地震で倒壊しました。当時は、第二次世界大戦の戦時下で報道管制が布かれており、被害状況は公表されていないが、記録によるとマグニチュード7.1で死者2252名、建物の全半壊5440棟という大被害でありました。区民の応仁寺再建の願いは時を経るにつれて高まり、戦後の不安定な社会情勢にもかかわらず、昭和29年に再建に着手し、昭和35年に落慶法要が行われました。

さて、今回、文化財の指定を受けたものは平成元年2月15日に盗難にあった品物の一部です。その時の世話方代表の方は盗難を苦にして、4月5日JR列車に飛び込み自殺をされました。ところが、平成20年7月に業者を通じて盗難品が出てまいりました。世話方の皆さんは地区の意見も取り入れて、買戻しの決定をし、買戻されました。そして、今回、市の有形文化財の指定を受けることになりました。かような経過でありますので機会があれば、応仁時に足をお運びいただけるとよいかなと思います。

以上で挨拶を終わります。ありがとうございました。

幹事報告

・例会変更等はお手元の資料のとおりです。



長田豊治幹事

委員会報告

〈出席奨励委員会〉

総会員数76名(内出席免除者14名の内出席者9名)出席者60名

出席対象者 60/70名	出席率 85.71%
欠席者16名(病欠者1名)	前々回修正出席率 97.06%

〈ニコボックス委員会〉

※三週連続出席率100%の場合は記念品を差し上げます。

- 加藤 良邦君 平成22年春彼岸、天候にも恵まれ無事に終える事が出来ました。深く感謝しています。本日、中日新聞うしろ姿チョコレート載りました。
- 長田 銑司君 良い事がありました。
- 森田 雅也君 長女、二女とも何とか合格できました。ありがとうございました。
- 粟津 康之君 本日の卓話、会員の黒田泰弘さんにはお世話になります。長女が無事、志望校の県立半田高校に合格しました。長男と同じ学校に通うこととなりました。
- 黒田 泰弘君 本日、卓話を担当させていただきます。
- 大竹 密貴君 長男が無事に大浜小学校を卒業しました。卒業式では、杉浦健次さんに大変お世話になりました。ありがとうございました。
- 鈴木 宏枝君 一番上の孫が、金沢大学に合格し、自宅から通学できると皆よろこんでいます。おばあちゃんとして初体験です。

卓話

「街頭紙芝居の愉しみ」会員 黒田 泰弘君

皆さんこんにちは。

団塊世代以上の方はご存知かと思いますが、街頭紙芝居の愉しみと言うことで、しばらくのお時間、お付き合い頂きたく存じます。

興味の無い方にとりましては、時代の波に埋もれた、日本風俗の一思ひ出話程度かと思われそうですが、我々紙芝居マニアにとりましては、戦前・戦中・戦後と激動の昭和史を知る事が出来る貴重なアイテムとなっています。特に政府が関与していました国策紙芝居と言われるものは、戦前の物と戦後GHQが関与した物の内容が全く違う所が注目されます。

本日は、せっかくの貴重なお時間をお借りしての事ですので、今日でしか見ることの出来ない紙芝居をご用意してきました。巨人・大鵬・玉子焼きのフレーズでお馴染みの大鵬物語全巻をご紹介しますと思いますが、その前に、街頭紙芝居について簡単にご説明申し上げます。いまから約70年前、昭和5年に、街頭紙芝居は東京浅草で誕生したと言われていまして、「魔法の御殿」をはじめ「黄金バット」「ハカバキタロー」(これは後に水木しげるさんの「ゲゲゲの鬼太郎」のモチーフとなった作品)「少年タイガー」などを世に出しました。以前にも、紙人形芝居で、「立絵(たちえ)」とも呼ばれるもの、



幻灯を用いた寄席芸の「写し絵」や、覗きからくりなど、紙芝居に似たようなものは御座いましたが、自転車の荷台に舞台をのせたこのスタイルはこの頃が始まりでした。街頭紙芝居は誕生すると間もなく街の人気者となり、不況による失業者の増大ということもあって、紙芝居を演じる業者も急激に増えていきました。昭和11年の全国紙芝居業者分布図によると、全国の業者数は9000人を越え、当時の台湾、朝鮮を含め、ほとんどの道府県で業者が営業をしていたことがわかります。いわゆる第1次ブームでした。こうした紙芝居ブームは、第二次大戦終了直後にもう一度現れます。昭和30年の資料によりますと、当時、全国の業者は2万人近いことを指摘しています。(実際はもっと多くの業者がいたものと思われます)しかし、昭和28年頃から急に衰えだした街頭紙芝居は、昭和30年代になると、テレビの普及や高度経済成長のための労働者要求に押されて、やがて一応の終止符をうつ形となりました。でも、廃業する仲間の中で、執着心の強い連中は、「クイズ」という子供の射幸心をそそるレパートリーを考え出しました。「さぁ、皆おいでやぁ、今日からクイズがあるさかいに皆買うてやぁ。買わんもんはクイズ出けへんでえ、一番早よ出けたもんには賞がある、さぁさぁ、皆買うてやぁ」「はい、よくできました」とこんな調子で、おっさんの態度がだんだん「街頭教育者」の様な感じに変わって行きました。このように街頭紙芝居は二度にわたるブームを引き起こして、全国の子どもたちの心をとらえたわけです。

小道具の説明ですが、業者が使用する紙芝居は、レンタル方式ですので、大変特徴的です。絵を描く方を「絵師」と言いますが、その絵が何度も使用に耐えるため、厚紙に貼られ、上からニスなどでコーティングされています。(この業者用の紙芝居がマニアの間では1番人気)その絵のレンタル業者を「絵元」と言います。紙芝居の舞台を兼ねた箱は「ネタ箱」と呼ばれ、飴、昆布、煎餅などを入れていました。

昭和25年、大阪の紙芝居師の日記を引用しますと、「飴を5束(1束が50本)と煎餅(直径20センチ厚み0.5ミリ位の赤・青・黄と色の付いた薄っぺらなウエハス)を1束(50枚)これを旨く六等分の扇形に切る。それにしめじ昆布(とろろ昆布を削り採ったあとの、あの正月の鏡餅飾りに使う向こう側が透き通って見える程の薄っぺらな昆布)、これもまた大きく見せるために広げて菱形に切る。これを二十枚、キッチンとネタ箱に並べ、飴は二本五円、煎餅は一枚一円、昆布は一枚五円で売る。(もちろんネタの内容は地域によって様々でした)舞台には紙芝居の絵を四組準備、内容は、漫画「ペコタン」、時代劇「矢太丸大活躍」、悲劇「天使」、活劇「少年ナイト」の四本立であった。ネタ代や絵の借り賃は後払いだと云うことで、親子四人と母一人、これで食べられたら元手要らずの結構な商売ではある。何処で演ろうと自由だが、中流以上の家庭の子供たちが集まる場所は、縄張り争いが激しい。他の場所での売り上げは、百円かせいぜい二百円だが、良い場所は、八百円、悪くても三百円はくだらない。」と書いてありました。なんとなく雰囲気がお分かり頂ける日記だと思います。また、余談ですが、大阪で創られた絵は刺激が強いものが多く(子供には人気があった)、東京には作家画家組合があって、良心的な絵が作られているとも言われていました。本日予定させて頂いております大鵬物語の製作業者は関東の一誠会で、品の良い製作業者の作と言う事になるのでしょうか。

それでは早速始めたいと思います。《大鵬物語》

本日、へたな紙芝居をご覧頂きましたが、私が以前やっていた更生保護のBBS活動やPTAなどで、子供向けイベントとして、むかし遊びの体験を企画し、行っていました。これはその時に使用した紙芝居で、昭和17年に発表された蜘蛛の糸です。この紙芝居は、街頭紙芝居に対して「教育紙芝居」と言われました。この時代は、戦争突入と共に、戦意高揚を目的とした国策紙芝居と言うものが台頭した時代でありました。この紙芝居で感心する事は、絵師による、大胆な構図と彩色の素晴らしさです。さすがにテレビっ子の子供達でさえ、食い入るように見ていました。それほど、当時の作り手の巧みさが際立っていました。

むかし遊びとしましては、その他にも射的・駄菓子屋ルーレット・スマートボール・ベーゴマ・メンコなど色々取り揃えて御座います。このような昔を思い出させるアイテムは、近年、認知症ケアにも使用されているともお聞きしています。もし、皆様方の中で、子供向けイベントやその他で、このような企画を必要とする方がおられましたら、ご協力させていただきますので、お声掛け頂きたいと思います。ご静聴有難う御座いました。

次回例会案内 平成22年4月7日(水)
卓話「楽器のお話・エルガー作曲：愛のあいさつ 他」
中部楽器技術専門学校 専任講師
ヴァイオリン奏者 加藤悦司氏